

【論考】

# 留学生急増国における日本へのプッシュ要因と プル要因についての検討

-ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカを中心に-

Push and Pull Factors of Studying in Japan:  
A Case Study of Four Countries where the Number of Inbound  
International Students Rapidly Increases  
(Vietnam, Myanmar, Indonesia, Sri Lanka).

首都大学東京 国際センター 岡村 郁子、黄 美蘭、竹田 恒太

OKAMURA Ikuko, KO Biran, TAKEDA Kota

(International Center, Tokyo Metropolitan University)

キーワード：留学生急増国、プッシュ要因、プル要因

## はじめに

日本における外国人留学生数は増加を続け、2018年5月1日現在の留学生総数は298,980人で、前年の267,042人に比べて31,938人(12.0%)増であった(「日本学生支援機構(JASSO)平成30年度外国人留学生在籍状況調査」による)。とりわけ直近5年ほどは連続して前年比10%を超える勢いで増加し、出身地域別では1位がアジアの279,250人(構成比93.4%)で、2位の欧州10,115人(同3.4%)を大きく引き離している。アジアの中では東南アジアおよび南アジアからの留学生数の増加が著しい。2013年度からのベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカからの留学生数は以下の【表1】に示すとおりであり、とりわけベトナムとミャンマーは急激な増加をみせていることがわかる。

こうした状況の背景にある要因を探り、正確に把握することは、留学生のさらなる戦略的なリクルーティングばかりでなく、留学後の日本あるいは出身国におけるキャリア形成を考える上でも必要不可欠であり、さらに留学中や留学前後に発生するトラブルを未然に防ぐ上でも重要であると考えられる。

【表1】ベトナム・ミャンマー・インドネシア・スリランカからの留学生数の変化

	2013年度	2016年度	2017年度	2018年度	増加率
ベトナム	13,799名	53,807名	61,671名	72,354名	424.3%
ミャンマー	1,598名	3,851名	4,816名	5,928名	271.0%
インドネシア	2,787名	4,630名	5,495名	6,277名	125.2%
スリランカ	統計外	3,976名	6,607名	8,329名	109.5%

(出典：日本学生支援機構 (JASSO) 平成30年度外国人留学生在籍状況調査より筆者作成)

## 1. 先行研究と本研究の課題

留学の動機や要因に関する多くの研究では、Push and Pull モデルを用いて分析が行われている。Mazzarol & Souter (2002) は、「プッシュ要因」は留学生の母国における留学を後押しするような経済的・社会的・政治的な要素を含む要因、「プル要因」は留学先の国にある学生を引き付ける要因と定義した。留学をするか否かの決定(ステージ①)には国内のプッシュ要因が、留学先の国の決定(ステージ②)および留学先の機関の決定(ステージ③)には受け入れ国あるいは受け入れ先の教育機関のプル要因が、それぞれ意思決定に影響を与えるとされる。

ただし実際には、ステージ①における意思決定が必ずしも国内のプッシュ要因のみに影響されているということではなく、Wadhwa(2016)の調査では、この決定にプッシュ要因とプル要因の両方から影響を受けるモデルが採用されている。また Swajan Das (2015) ではプッシュとプルの両方の要素をもつ第3の影響要因として「Push-Pull 要因」を想定することによって説明を試みている。佐藤(2012)はネパールからの日本留学生に関する調査分析の結果、留学生増加のプッシュ要因としては政治的混乱と経済停滞のために国内での雇用機会が少ないこと、高等教育人口の増加が国内の高等教育機関が収容しきれないこと等、プル要因としては学費が比較的安価なこと、アルバイトが可能であること等を挙げた。佐藤はタイやインドネシアについての比較研究も行っているが、ベトナムやスリランカ、ミャンマーなど他の東南アジア・南アジア諸国については、さらなる調査が待たれている。

本研究では、日本への留学生数が急増している東南アジアおよび南アジア諸国のうち、特に増加率が顕著であるベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカの4か国について、以下の各点を明らかにすることを目的とする。

- ① 各国からの日本留学の背景となる政治的・経済的・歴史的・社会文化的背景等について
- ② 各国における日本留学のプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について

## 2. 研究方法と手続き

### (1) 研究方法

2018年6月から9月にかけて、日本国内および対象国現地でのインタビュー調査と補助的な質問紙調査を実施した。研究代表者および共同研究者の人脈からのスノーボールサンプリングにより各国の日本留学経験者（ベトナム8名、ミャンマー7名、インドネシア2名、スリランカ3名）を確保し、日本国内ならびにベトナム、ミャンマー、スリランカへ赴き、インタビューを実施した。インタビューはいずれも1時間程度、留学生の出身国において日本留学へのプッシュ要因となったことがらやその背景にあるもの、日本での留学生活、アルバイトの様子、将来希望するキャリア等について、半構造化インタビューを行った。

### (2) 分析方法

インタビュー結果について音声データを文字化し、日本留学の動機に関連する箇所を抜き出し、MAXQDAを用いて質的に分析コーディングを行った。各国別の協力者のプロフィール（出身国、年齢、現在の職業、日本滞在の形態、渡日前の日本語学習歴、渡日の手段、将来の希望）を、次ページの【表2】に示す。

## 3. 国別の調査結果

### (1) ベトナム

#### ①日本留学の背景

ベトナムから日本への留学生は2013年度に13,799名であったのが2018年度には72,354名と、5年間で5倍以上に急増した。ベトナムでは長く正式な日本留学の情報が得にくい状況であったが、2017年3月にJASSOベトナム事務所が開設され、現在萩原所長ほか3名の職員が留学相談の対応や日本留学のプロモーション等に当たり、多くの利用者を得ている。上記JASSOベトナム事務所によれば、2018年度の統計でベトナムからの留学先としてもっとも多いのはアメリカ（19,336名）、次いでオーストラリア（14,491名）、日本は3位で10,614名であった。しかしながら、この数字は学部・大学院・短大の正規生の数であり、ここに「準備教育課程」や「語学教育機関」への留学者数を合わせると、日本（2017年度で61,671名）が第1位、2位がアメリカ（20,834名）、3位がオーストラリア（20,834名）と順位が逆転し、日本への留学者が群を抜いて多い。こちらの数字の2016年度2017年度からの増加率をみると、アメリカ5%、オーストラリア6%であるのに対し、日本は15%と増加が顕著である。

前出JASSOベトナム事務所の岡田前所長によれば、こうしたベトナムの留学ブームの背景には、高等教育進学者の増加、子どもへの投資、一発勝負の大学入試システム、国内の大学への不信、大卒者

の失業率の高さ、学歴やスキルによる賃金格差、先進国へ留学することによる自信・満足などが挙げられるという。ベトナム市場への各国からの注目度が高まるにつれて、外国からの投資も増加している。特に日本企業のベトナムへの進出は著しく、2014年にホーチミン、2015年にはハノイにイオンモールが出店したこともあり、留学費用が英語圏の国に比べて安く、距離的に近い日本への関心はさらに高まっているとのことである。

【表2】インタビュー協力者のプロフィール

出身国	インタビュー場所	年齢	現在の職業・学生の場合は学年	日本滞在の形態	渡日前の日本語学習歴など	渡日的手段	将来の希望	
ベトナム	V1	ハノイ	22歳	大学4年生(ベトナム)	都内国立大学交換留学生(2017年~2018年3月)	大学で3年間	大学からの交換留学	東京のベトナム人材派遣会社に勤務予定
	V2	ハノイ	22歳	大学4年生(ベトナム)	地方国立大学交換留学生(2017年9月~2018年8月)	大学で3年間	大学からの交換留学	日本に戻って大学院へ進学、その後ベトナムで通訳や翻訳者になる
	V3	ハノイ	22歳	ハノイ市内の日本への留学斡旋会社(日本語教育)	大阪のJapan Foundationで2か月研修	大学で4年間	大学からの短期研修	ハノイで現在の日本語教育の仕事続ける
	V4	ハノイ	21歳	地方国立大学3年生(日本)(経営学、農業・生物学専攻)	大学 学部正規生	高校で3年間貿易大学で日本ビジネスを専攻後、中退して日本へ	ベトナムの大学を中退して日本留学試験を受験	オーストラリアの大学院進学希望 将来はベトナムに自分の農場を開く
	V5	ハノイ	20代	日本人向けのコールセンター、アウトソーシング会社(ハノイ)	日本語日本文化研究生(国費 日研生)	大学で4年間	国費短期留学	ハノイの日系企業で現在の仕事を続ける
	V6	東京	23歳	都内私立大学4年生経営学専攻	大学 学部正規生	高校を卒業して来日 渡日前の学習歴なし	いとこが働いている日本語センターを通して来日	電話販売の会社に勤務予定(通訳の仕事)。日本で4~5年働いたら帰国希望
	V7	東京	20歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	高校を卒業して来日 渡日前にひらがなとカタカナを少し勉強	日本にいるいとこ(日本語教師)からのサポート	日本語学校を卒業したら、日本の専門学校か大学に進学し、ホテル、旅行関係の勉強をしたい
	V8	東京	25歳	都内国立大学修士課程1年生 バイオメディカルエンジニアリング専攻	都内国立大学大学院修士課程正規生	大学卒業(2011年8月から2016年4月まで)、バイオメディカルエンジニアリング専門(医療機器関連) 日本で働きたいため、2015年4月から日本語を勉強	指導教官とコンタクトを取り、ベトナムで行われた日本語による入学試験に合格	日本で5年ほど働き、将来はハノイへ帰りたい。
ミャンマー	M1	東京	30歳	大学1年生	大学 学部正規生	日本語学校で勉強	日本にいる弁護士(エージェンツ)に依頼	日本で3年くらい働いてから、NGOに入り、ミャンマーと日本を行き来しながら働く
	M2	東京	24歳	専門学校生	専門学校生	日本語学校で勉強	ミャンマーにある仲介会社に依頼、日本にいる叔母の伝手	日本で5年くらい働いてから、ミャンマーに帰り、自分の会社を作る
	M3	東京	29歳	大学1年生	大学 学部正規生	日本語学校で勉強	ミャンマーにある仲介会社に依頼	ずっと日本で働く
	M4	ヤンゴン	38歳	地方国立大学博士課程	小学生時代2年間(父親の仕事)、学部で日研生として1年、大学院生として4年間	小学校時代日本で過ごした後 に帰国、ヤンゴンの大学で4年間勉強	父親の仕事に帯同、日研生(国費留学生)大学院入試受験	博士号を取ってヤンゴンの大学で就職
	M5	ヤンゴン	33歳	日本の大学のヤンゴン駐在事務所勤務	都内私立大学 学部正規生	ヤンゴンで大学1年まで勉強してから日本で日本語学校入学、大学受験に備える	日本にいる姉の伝手	ヤンゴンで日本語教育に従事
	M6	ヤンゴン	30代	日系IT会社社員	IT関連会社社員	ヤンゴンのコンピューター大学を卒業後、日本で就職。プログラミングの技術習得のために日本語を勉強	ヤンゴンのIT企業から日本へ派遣	ヤンゴンの日系IT企業で現在の仕事を続ける
	M7	ヤンゴン	20代	日系IT会社社員	日本語学校2年間 専門学校2年間	来日してから日本語学校で勉強	日本にいる姉の伝手	ヤンゴンの日系IT企業で現在の仕事を続ける
インドネシア	I1	東京	28歳	大学院博士前期課程1年	大学院生	1年間交換留学として来日した際に勉強	日本の大学の先生とコンタクト後、大学院入試受験	インドネシアに帰り大学教員、または日本で研究所勤務
	I2	東京	35歳	大学院博士後期課程2年	大学院生	JAICAの研修プログラムに参加	日本の大学を受験、奨学金の受給が決定し渡日	日本で就職
スリランカ	S1	東京	24歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	高校時代から塾や学校で日本語を勉強、大学で日本語専攻	スリランカにあるエージェンツ(高校時代日本語を教えた塾の講師)に依頼、日本から日本語学校の教師が来て面接	日本語教師、通訳等日本語を活かした仕事をしたい
	S2	東京	28歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	16歳の時にOレベル試験受験のために日本語を選択、大学では日本語専攻	高校の友人より紹介を受けたスリランカにあるエージェンツに依頼	インタビュー当時は大学院進学を希望していたが、現在は東京で就職している
	S3	東京	27歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	高校で日本語の授業を履修、エージェンツ付属の日本語学校で1か月勉強	日本留学中の妹より紹介を受けたエージェンツに依頼	日本で空港の地上職

また、ベトナムでは古くより日本のアニメや漫画の人气が高く、2016年からは初等教育段階で日本語教育が導入されることとなった。日本語能力試験 JLPT 受験者数は東南アジアで1位であり、日本留学試験 EJU 受験者も増加し、2018年はハノイで109名、ホーチミンで248名と前年の1.5倍程度であった。現地には日本企業も多く、日本語を習得すれば就職が有利になることもあり、日本留学はトップクラスの人气を誇る。こうした背景に加え、近年、私立の国際学校の増加、研修旅行や大学の国際プログラム増加、留学生・技能実習生など周辺で外国へ行ったことのある人が多いなど外国へ出ること自体が身近になっているという。

## ②日本留学のプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について

本調査におけるベトナムのインタビュー協力者8名の語りにみられる日本留学の動機について、プッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因に分けて、以下の【表3】に示した。

ベトナムからの留学経験者においてもっとも多くみられたプッシュ要因は【社会における海外留学への高評価】であった（以下、大カテゴリー＝【 】, 小カテゴリー＝[ ], 語りの具体例＝「 」を示す）。[留学経験による就職の有利さ]として、給与の高さや昇進の早さについては協力者の全員が述べている。また、留学の中でも[日本留学への評価の高さ]は、日本企業の進出による通訳や翻訳という[日本留学経験の需要]とあいまって、年々高まっていることがうかがわれる。

【大学教育の不十分さ】と【就職の困難さ】にも多くの言及がみられた。[ベトナム国内の大学のレベルの低さ]から日本の大学進学を志したV4をはじめ、「大卒の学歴や専門に見合った仕事がない」（V6）、「新卒者には専門性の高い仕事を見つけるのが難しい」（V5）というベトナム社会の事情がうかがわれる結果であろう。

【家族のサポート】としては、同じく日本語を勉強して日本で働いている兄からの[日本語学習の勧め]により、日本留学に至ったV2は、以下のように述べている。

「高校生ぐらいのとき、お兄ちゃんが「日本語勉強してたら、もっといい仕事見つけるよ」って言われたんです。日本語選んで、最初だけは、好きじゃなかったんですけど私、漢字がめっちゃ大好きで、好きになっちゃいました、日本語。」（V2）

このように、家族や日本にいる[先輩や友人のサポート]を得て日本へ留学し、日本語を習得することで付加価値をつけて[有利な就職]をし、[高い給与]をねらう者が多くみられた。

日本を留学先に選ぶプル要因としては、【日本人・日本文化に対する好意】を挙げた者がもっとも多かった。「子どもの頃から日本のアニメやドラマを知っていて親しみがある」（V4）ことや、V2、V6、V7のように兄やいとこが日本で働いていることで日本留学が身近なものと感じられていることがわかる。

さらに、プッシュ・プルの両方の要素を兼ね備えるプッシュ・プル要因の一つとして【地理的なメリット】が挙げられ、ベトナムからの〔距離の近さ〕、〔渡航費の安さ〕といった物理的な留学のしやすさが、さらにハードルを下げていることが明らかになった。また、家族や親戚・友人が日本へ留学あるいは就職で日本に行っている、幼時から日本のドラマに親しむなど、【幼時からの日本文化へのなじみ】が、日本への距離を心情的にも近いものに行っていることがうかがわれる。

【表3】ベトナムからの日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因（●は大カテゴリー、・は小カテゴリー、以下の表はすべて同様）

	プッシュ要因(41)	プル要因(42)	プッシュ・プル要因(6)
ベトナム	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 社会における海外留学への高評価(15)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 留学経験による就職の有利さ</li> <li>・ 日本留学への評価の高さ ・ 給与の高さ</li> </ul> </li> <li>● 大学教育の不十分さ(5)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学のレベルの低さ</li> </ul> </li> <li>● 制度面の充実(4)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 留学斡旋業者の存在</li> </ul> </li> <li>● 家族のサポート(4)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本語学習の勧め ・ 留学への支援</li> </ul> </li> <li>● 第二選択としての日本留学(4)</li> <li>● 就職の厳しさ(4)</li> <li>● 日本留学経験への需要(3)</li> <li>● 不完全な職場環境(2)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 給与の低さ ・ 技術の低さ</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本文化・日本人に対する好意(12)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アニメやドラマへの親しみ ・ 日本人の親切さ</li> </ul> </li> <li>● 金銭的なメリット(7)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アルバイトが可能 ・ 学費の安さ</li> </ul> </li> <li>● 日本の環境の良さ(7)</li> <li>● ネットワークの存在(5)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本にいる家族や親戚のサポート</li> <li>・ 日本にいる先輩・友人のサポート</li> </ul> </li> <li>● 日本の大学教育のレベルの高さ(4)</li> <li>● 日本の健全な労働環境(4)</li> <li>● 日本の奨学金制度(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 幼時からの日本文化へのなじみ(3)</li> <li>● 地理的なメリット(3)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 航空券の安さ</li> <li>・ 距離の近さ</li> </ul> </li> </ul>

ベトナムからの留学経験者に特徴的にみられたプッシュ要因に【第二選択としての日本留学】がある。以下のV1やV5のように、すでに多くの優秀な使い手のいる英語よりも、「日本語」という少し人と違う選択をした者もみられた。

「大学入る前にすごく悩んで。そのときは英語がすごく普及されて。私が、他の人と違う道に進んでみようかなと思って兄と相談したら、兄は「日本語はどうか」と言われました」(V1)

「もともと私は外国語がすごく好きで、まず一つ目の理由は、高校のときは専門は英語だったんですけど、多分、ハノイに行ったら英語をできる人はいっぱいいますので、多分、勝てないと思っていて、じゃあ、別の言語を勉強しましょうって思ったんですね。」(V5)

また、日本留学を経て現在ベトナムの留学斡旋会社で日本語を教えているV3は、以下のように語っている。

「実はその生徒さんは、高校でも勉強する成績もあんまり良くなかったと思います。それで、将来のためにいい仕事を探すために、日本語を勉強して日本へ行って、もっといいチャンスを探したいと、思っていると思います。」

特に地方出身者で高校時代にあまり成績が良くなく、大学へ進学してもよい就職が見込めない場合に日本への留学を視野に入れるようで、ここでも第二選択として日本留学が選ばれているといえる。

## (2) ミャンマー

### ①日本留学の背景

2018年現在、日本の大学や大学院、専門学校などの高等教育機関及び日本語教育機関に在籍しているミャンマー人留学生は5,928名で、全体の2.0%を占め、前年に比べて18.8%増えている（日本学生支援機構, 2019）。【表1】でみたとおりに、2013年から2018年でその数は3倍近くとなり、留学生数急増国の主要国である。

国内の教育状況をみると、ミャンマーにおける2016年時点での高等教育機関の就学率は約12%である（JETRO, 2016）。高等教育機関の在籍学生は約60万人のうち、通学型大学に約20万人、遠隔教育大学に約40万人在籍しており、後者が3分の2を占める。ミャンマーにおいて、知識やスキルを身につけるためには、複数の学校に同時にあるいは継続して通うという、言うならば「教育のカスタマイズ」状態が存在する。歴史的に政治運動の中心だったヤンゴン大学とマンダレー大学をはじめとするエリート大学の学部は、学生の非政治化目的で、都市部から遠く離れたところに移転され、これらの大学は大学院のみの大学になったため、どうしても都市部で学びたい学部生は学部が残された大学等に進学することになり、学生と教員は長距離の通学・通勤を強いられ、疲弊し、必然的に教育の質は低下したとされる（上別府, 2018）。

ミャンマーにおける留学希望者の学習言語は英語が1位であり、日本語はそれに続く。国際交流基金が行った世界日本語教育機関調査によれば、ミャンマーの日本語学習者は2012～2015年の間で3,000人から11,000人に増加した（国際交流基金, 2015）。日本語能力試験の受験者を見ると、2014年の4,434人が2015年には8,000人へと大幅な増加を見せ、特に、初級レベルのN5とN4の受験者が急増している。このような背景には、日本の投資・進出企業の増加が考えられる。日本企業の進出により、高い日本語能力を持つミャンマー人に対する需要は高く、売り手市場となり、給料が増加している。拡大する需要状況を反映し、日本企業への就職の人気は上昇し、日本語力があることは就職に有利に働くため、必然的に日本語熱が高まっている（上別府, 2018）。

### ②日本留学のプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について

ミャンマーからの留学経験者7名の語りにみられる日本留学の動機について、プッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因に分けて、【表4】に示した。

ミャンマーからの日本留学のプッシュ要因でもっとも多く挙げられたのは【就職の厳しさ】であった。「大学を卒業してもすぐには仕事が見つからない」ことや「大学での勉強だけでなく、外でいろいろな知識やスキルを身につけないと良い就職ができない」(M5)ことから、日本留学で就職の選択肢を広げようという戦略である。ミャンマーの特徴的なプッシュ要因である【少数民族の大変さ】もこれに共通しており、少数民族への就職差別についての言及もみられた。

【表4】ミャンマーからの日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因

	プッシュ要因(29)	プル要因(21)	プッシュ・プル要因(3)
ミ ヤ ン マ ー	<ul style="list-style-type: none"> <li>●就職の厳しさ(7)</li> <li>●制度面の充実(3)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・留学斡旋業者の存在</li> </ul> </li> <li>●社会における海外留学への高評価(3)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本留学への評価の高さ</li> </ul> </li> <li>●不完全な職場環境(3)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・将来性への不安</li> </ul> </li> <li>●少数民族の大変さ(3)</li> <li>●大学教育の不十分さ(4)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践的なキャリア教育の不足</li> <li>・教育の質の低さ ・設備の悪さ</li> </ul> </li> <li>●日本留学経験への需要(2)</li> <li>●家族のサポート(2)</li> <li>●第二選択としての日本留学(2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本の環境の良さ(9)</li> <li>●ネットワークの存在(6)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本にいる家族や親戚のリポート</li> <li>・日本にいる先輩・友人のサポート</li> </ul> </li> <li>●日本文化・日本人に対する好意(3)</li> <li>●金銭的なメリット(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生活の質の向上(2)</li> <li>●SNSの発達による日本についての理解(1)</li> </ul>

【大学教育の不十分さ】では、[設備の悪さ]や[教育の質の低さ]に加えて、[実践的なキャリア教育の不足]についての以下のようなM1による語りも特徴的である。

「(ミャンマーでは、今、大学や大学院を卒業した後はすぐに就職が)できません。なぜなら、大学で勉強することはレベルが下です。大学が終わった後に、また勉強しなければ就職できません。コンピューターなどは全て大学ではなくて、外で勉強します。・・・自分が好きなことは全て大学にあるわけではありません。大学で勉強するものは少ないです・・・大学が終わった後も2～3年はまた勉強して、その後に就職します。」(M1)

M6は現在ヤンゴンにある日系企業に勤務しているが、ミャンマーの大学を卒業後、専門学校でコンピューター技術を学び就職、その後さらにIT技術を学ぶために来日し、必要に迫られて日本語学校で日本語を習得した。これもミャンマーの大学卒業者のキャリアパスの一つであるといえよう。

軍政が終わって日本企業が進出する『最後のフロンティア』ともいわれるミャンマーでは、近年日本企業の進出による【日本留学経験への需要】が高まり、今後ますます日本留学が盛んになることが予想される。プッシュ・プル要因に挙げた【生活の質の向上】も、その要因となるであろう。一方で、



そこには【第二選択としての日本留学】という消極的なプッシュ要因も存在する。ミャンマーでのその理由はベトナムとは異なっており、イギリスへの留学を希望しているが、現在イギリスへのビザが取得しにくいいため、日本にいる叔母の伝手で日本を選んだとするM2のような例である。これも元イギリス領であるミャンマーの特徴的なプッシュ要因ともいえる。

### (3) インドネシア

#### ①日本留学の背景

インドネシアでは長年、博士号を有する教育の少なさが高等教育の質向上のための課題と指摘されてきた。高等教育総局はこの課題に対応するため、2008年以降、教育文化省の予算により、現役大学教授が海外で博士号を取得するためのサンドイッチ・プログラム奨学金を支給している(清水, 2012)。同プログラムは、国内の博士課程に在籍しながら海外の協定大学に一定期間留学し、学位を取得するものである。高等教育総局は、2008年～2010年の3年間にこのプログラムなどで4239人を海外の大学に派遣した。留学生の大多数は理工系を専攻している。

2018年5月1日現在、日本の大学や大学院、専門学校などの高等教育機関及び日本語教育機関に在籍しているインドネシア人留学生は6227人で、全体の2.1%を占め、前年に比べて12.5%増えている(日本学生支援機構, 2019)。そのうち、日本語教育機関に在籍している留学生は1558人で、全体の1.7%を占め、前年に比べて19.1%増加している(日本学生支援機構, 2019)。このように、日本に留学するインドネシア人はここ数年、増加傾向にある。

#### ②日本留学のプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について

本調査におけるインドネシアからの留学経験者2名のみであったが、語りにみられる日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について、以下の【表5】に示す。

インドネシアからの日本留学のプッシュ要因でもっとも多く挙げられたのは【制度面の充実】であった。[交換留学制度の充実]によって日本に留学するチャンスを得たことのほか、JICAのプログラムで研究の機会を得て来日したことなどが述べられている。次に【不完全な職場環境】【就職の厳しさ】が同数でもっとも多かった。【不完全な職場環境】では、[給与の低さ]に加えて[自己成長の難しさ]が挙げられたが、研究職にあるI2は研究環境の限界などについて以下のように述べている。

「インドネシアの会社の環境があまり良くないのです。私が成長するためには、会社の環境があまり良くないのです。途上国は研究が優先ではありません。私の会社は研究の機関ですが・・・会社での成長が難しいのです。」

プル要因で大きかったものには【日本の奨学金制度】があるが、I1, I2ともに「奨学金がなかったら日本留学は難しかった」と述べ、高度人材の受け入れには奨学金制度が大きな役割を果たしていることがわかる。

インドネシアに特徴的にみられたプッシュ・プル要因に【国民性の類似】は、「話し方が丁寧」「ストレートなものの言い方をしない」「親切」などいくつかの国民性の共通点が述べられ、精神的にストレスなく留学ができることが日本を選ぶ要因の一つになっていることがうかがえる。

【表5】インドネシアからの日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因

	プッシュ要因(17)	プル要因(19)	プッシュ・プル要因(3)
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> <li>●制度面の充実(7)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・交換留学制度の充実</li> </ul> </li> <li>●不完全な職場環境(4)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・給与の低さ</li> <li>・自己成長の難しさ</li> </ul> </li> <li>●就職の厳しさ(4)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職試験の厳しさ</li> </ul> </li> <li>●社会における海外留学への高評価(1)</li> <li>●家族のサポート (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本の環境の良さ(10)</li> <li>●日本文化・日本人に対する好意(3)</li> <li>●日本の奨学金制度(3)</li> <li>●日本の大学教育のレベルの高さ(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●国民性の類似(3)</li> </ul>

#### (4) スリランカ

##### ①日本留学の背景

日本語学校の学生を含むスリランカ人留学生数は2010年には930人であったが2018年には約9倍に近い8,329人まで増加、日本語学校の在籍者数のみに限定すると2010年の153人から25倍を超える3,900人にまで増加している。同じ期間の大学、短大、専修学校の在籍者数の伸びが777人から6倍弱の4,429人であることを考えると、近年のスリランカ人学生の増加は日本語学校への留学生の爆発的な増加に牽引されているといっていよう。

スリランカにおける高等教育への進学は大変な難関となっている。大学進学率でみた場合、2015年ではAレベル試験で大学進学のための資格を取得したものが15,5477人(255,191人受験)なのに対し実際に大学進学を果たした学生は29,083人で大学進学資格取得者のうち19%にとどまっている(Statistical Abstract, 2017)。この状況はクマーラ(2007)が問題点として指摘した当時よりは改善しているものの、依然として中等教育の高い普及率に対して高等教育の普及が追い付いていないと言えるだろう。そして、それに伴い中等教育修了者が労働市場で必要とされる技能知識やノウハウ

を持たないため企業への就職が困難である、或いは自営業を営むことも難しいといった若者が自立できない環境も依然として残っていることが推察できる。

## ②日本留学のプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について

スリランカからの留学経験者3名のみであったが、語りにみられる日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因について、以下の【表6】に示す。

【表6】スリランカからの日本留学へのプッシュ要因、プル要因、プッシュ・プル要因

	プッシュ要因(17)	プル要因(13)	プッシュ・プル要因(2)
ス リ ラ ン カ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●社会における海外留学への高評価(4)</li> <li>●制度面の充実(3)</li> <li>●家族のサポート(2)</li> <li>●大学進学の高難しさ(2)</li> <li>●日本語の学びやすさ(2)</li> <li>●社会における日本留学経験の需要</li> <li>●就職の厳しさ</li> <li>●不完全な職場環境</li> <li>●中等教育での日本語教育の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本文化・日本人に対する好意(6)</li> <li>●金銭的なメリット(3)</li> <li>●ネットワークの存在(2)</li> <li>●日本の奨学金制度</li> <li>●日本の環境の良さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本文化へのなじみ(2)</li> <li>・ドラマ「おしん」の浸透</li> <li>・スリランカ人タレントの日本での活躍</li> </ul>

スリランカでもっとも多く挙げられたプッシュ要因は【社会における海外留学への高評価】である。空港で働きたいと希望する S3 は、自分の将来のためには留学が不可欠であったと語った。

一方 S1 は、「スリランカでは大学に行けるのはほんの一握りのエリートのみであるため、大卒であれば留学をしなくても就職先には困らない」と述べている。それだけにスリランカの日本留学の背景にも示したように【大学進学の高難しさ】は深刻で、「大学は行けない人が多いから、その人たちは仕事を見つける、見つからなかったら、日本に留学したいという人が多い」(S1) というようなパターンで留学を選択するケースは一定数いるとみられる。

また S2 は、「以前は英語が話せれば簡単にいい仕事が手に入ったが状況は変わり、英語に加えもう一か国語外国語が話せることが就職の際に役立つようになった」と語った。

「前は英語しゃべれる人なんかは、就職も簡単にできるいい会社に入れるし、そんなことあったのに、最近というか、なんか日本語だけじゃなく中国・韓国・フランス・ドイツ・ロシア、そんな言語を勉強して、その会社になんか簡単に入れる。その言語を話せるんだったら給料も高いし、就職も簡単にできる。」

スリランカでは他の三か国と異なり、日本企業の進出がそれほど顕著ではない。本調査のインタビューからも、日本語を学んでも、それをスリランカ帰国後に活かすにくい環境であると留学生や関係者から認識されているということが浮かびあがる。共通して聞かれる声としては、日本語を学んだことが帰国後のキャリア形成にポジティブな影響を与えるかどうかについて影響は限定的ということである。事実、S1は日本語教師か通訳になるということをお話しており、S3についても空港という環境においては日本語を学んだことが活かせるのではないかと。

これに加え、1986年以降継続して右肩上がりだった海外への出稼ぎ労働者の派遣数が2014年中東の石油価格の急落を機に急減したことが日本留学希望者の増加に少なからぬ影響をもたらしたのではないかと考えられる。鹿毛(2016)によればスリランカにおいて海外に出て働くことは「誰もが1度が考えたことがある人生の選択肢の一つ」であり社会に普遍的に根付いている。2014年のピーク時には300,703人であった海外出稼ぎ労働者の派遣人数は2017年には212,162人まで急減をしている。同時期の日本語学校への留学生の増加率を見ると2014年度(前年比96.1%増)、2015年度(前年比118%増)、2016年度(前年比86.2%増)、2017年度(前年比73.2%増)と爆発的に増加をしており、中東に働きに出ていた層の一部が、代替的な行先として日本留学を選択するようになったことが推察される。

#### 4. まとめと考察

以上、日本への留学生が急増する4か国について、留学経験者へのインタビューをもとにそのプッシュ要因とプル要因を探ってきた。共通する主なプッシュ要因としては、以下の各点が挙げられる。

- ① 社会における海外留学への高評価
- ② 制度面の充実
- ③ 就職の厳しさ
- ④ 現地の不完全な職場環境
- ⑤ 家族のサポート

一方、日本側のプル要因として多くの国で共通していたのは、以下のような点であった。

- ① 日本の環境の良さ
- ② 日本文化・日本人に対する好意
- ③ 金銭的なメリット(奨学金、アルバイトなど)
- ④ ネットワークの存在

国により異なる背景や要因は存在するものの、共通してみられたのは日本留学が現地社会で高い評価を受けていること、日本という国への親しみや、環境の良さ、給与の高さに魅力を感じて留学している点であった。

一方、国別にみられた特徴的なプッシュ要因としては、以下のようなものが挙げられる。

ベトナムにおいては、古くから外国に住むことのハードルが低く、家族内でも比較的気軽に日本へ留学する雰囲気がある。また、JASSO ベトナム事務所の開設などにより、よりいっそう日本留学の情報が得やすくなっている。ミャンマーでは、軍政が解かれて民主制へ移行し、日本企業の進出が著しく、社会における需要が急増している。また今回のインタビューへの協力者には、日本の大学の現地駐在事務所からの紹介の方々も含まれており、日本留学の促進はさらに進むものと考えられる。

インドネシアにおいて特有のプッシュ要因としては、多文化国家特有の就職機会の不均等がある。他の民族と比較して国内でよい仕事を得にくい少数民族は、国内での競争をさけるために海外留学を選択することが多く、国民性の共通性から日本が選ばれるという傾向がみられた。

スリランカでは、日系企業の進出は他の3か国ほど顕著ではないものの、近年急速に中等教育における日本語教育環境が整い、日本語学習者数も急増している。スリランカに限らず、現地で日本語教育に携わる関係者のたゆまぬ努力も、日本への留学生急増の要因となっているといえるだろう。

さらに、どの国においても高度人材と企業のマッチングを行う人材紹介会社のニーズも高まっており、日本資本の日本留学・就職斡旋、人材派遣を行う会社により仲介が行われている。例えばミャンマーにある会社では2年間で80万円を取り、日本に派遣してIT教育などを行い、ミャンマーの日系企業への就職を斡旋しているという。現在のミャンマーの平均所得は職種によって幅があるものの、月収8,000円程度から、外資系企業で50,000円程度といわれており、1年間40万円は多大な金額である。主に支払いは親がするケースが多いということで、先行投資としてこれだけの資金をかけても、日本でビジネススキルを身に付けてミャンマーへ帰って就職すれば採算がとれる、という状況がある。

一方で、特に技能実習生をはじめ日本における就労者数が急増しているベトナムにおいては、外国人労働者への差別や、期待したほどの給料ももらえず悪条件下での労働、悪質な仲介業者による被害などについての言及も多くみられ、今後の日本社会への大きな課題が改めて提示される形となった。早急な解決は困難な面もあろうが、今回の調査の成果をふまえ、対象国が遂げつつある急激な社会的・政治的・経済的变化に日本がいかに対応するのが、今後のグローバル化の大きなキーとなることは間違いのないであろう。

#### 【参考文献】

CENTRAL BANK OF SRI LANKA DATA LIBRARY. (2018, April 6) Foreign Employment-

Total Placements. Department of census and statistics - Sri. (n.d.).

Statistics Abstract 2017 CHAPTER XIV - EDUCATION.

外務省 (2017) 「ミャンマー連邦共和国基礎データ」「インドネシア共和国基礎データ」「ベトナム共和国基礎データ」

- JETRO (2012) 「教育事情—インドネシア BOP 層実態調査レポート」 「教育事情—ミャンマー BOP 層実態調査レポート」
- JETRO (2019) ベトナム基本情報 [https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic_01.html) (2019年 2月10日閲覧)
- 上別府隆男 (2018) 「ミャンマーの高等教育改革と今後の方向性」 『リクルートカレッジマネジメント 210』 58-61.
- クマーラ,アーナンダ (2007) 「スリランカの教育制度の歴史と現状及びその問題点について」 『鈴鹿国際大学紀要 Campana=Suzuka International University journal campana』 13, 1-19.
- 国際交流基金 (2015) 「2015年度海外日本語教育機関調査」
- Mazzarol, T., & Soutar, G. N. (2002) “Push-pull” factors influencing international student destination choice. *International Journal of Educational Management*, 16(2), 82-90.
- 日本学生支援機構 (2019) 「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」
- 李敏 (2015) 「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究: Push-and-Pull モデルに基づいて」 『(新堀通也教授追悼特集)大学論集』 48, 97-112.
- 佐藤由利子 (2012) 「ネパール人日本留学生の特徴と増加要因の分析—送出し圧力が高い国に対する留学生政策についての示唆—」 『留学生教育』 17, 19-28.
- 鹿毛理恵 (2016) 「スリランカの海外出稼ぎと経済社会—政策と実績 (特集 内戦後のスリランカ経済—持続的発展のための諸条件)」 『アジア研ワールド・トレンド』, 22(1), 30-34.
- 清水英明 (2012) 「アジアの高等教育と留学事情—第一回インドネシア」 『Between』 4-5号, 36-37.
- Wadhwa, R. (2016). Students on move: Understanding decision-making process and destination choice of Indian students. *Higher Education for the Future*, 3(1), 54-75.

#### 【謝辞】

本稿は日本学生支援機構による平成30年度「学生支援の推進に資する調査研究事業 (JASSO リサーチ)」の採択を受けて行った調査研究の結果の一部を、ご依頼によりウェブマガジン用に改稿したものです。調査にご協力くださった皆様に感謝いたしますとともに、ご支援賜りました日本学生支援機構関係各位に、心より厚く御礼申し上げます。